記　念　講　演

㈱グローバルダイニング代表執行役社長ＣＥＯ　**長谷川　耕造**

○髙橋　　商学学術院イベントの「次世代への先見」で、午前中は懸賞論文の優勝者のプレゼンテーションがありましたし、川本先生の記念講演がありました。

午後はビジネスプランのプレゼンテーションを今終えまして、最後のセッションを始めさせていただきたいと思います。

15時40分から記念講演ということで、学外から大変有名な先生をお呼びしております。株式会社グローバルダイニング代表執行役社長ＣＥＯでいらっしゃいます長谷川耕造先生です。

長谷川先生の略歴を紹介させていただきますと、1969年４月に早稲田大学商学部に入学されました。1971年５月に商学部を自主的に中退されまして、欧州を放浪されました。そして1973年10月に有限会社長谷川実業を設立されまして、1973年12月に高田馬場に喫茶「北欧館」という喫茶店をオープンされました。1997年１月にはグローバルダイニングという名前に商号を変更されまして、現在はグローバルダイニング代表執行役社長ＣＥＯにご就任されておられます。ちなみにグローバルダイニングは東証２部に上場ということであります。

長谷川先生は、母校に強い思いを抱かれておられまして、いろいろご芳志をいただきまして名誉賛助員ということで、色々と後輩たちの面倒とか学生の奨学金等々に有効に使わせていただいております。したがいまして、推薦校友であり名誉賛助員という肩書もお持ちでいらっしゃいます。

長谷川耕造先生のご講演のタイトルは、「地球環境の行く末、人類の行く末」ということです。

では、長谷川先生、よろしくお願いいたします。

○長谷川　　ご紹介いただきました長谷川でございます。

このような晴れがましいところでおしゃべりをするなどということは初めてですし、非常に緊張しているのですが。創立125周年記念という場で、大上段の先見ということに対してどういう話ができるかと考えたのですが、ここに書いてありますように、地球環境の行く末とその中に住む私たちの行く末ということについて食い物屋の経営者としては全く関係ない話なのですが、現代社会に行きている我々誰一人として無視できないことだと思いましたので、いつも考えていることを述べさせていただこうと思います。

（スライド１）

まず、地球の行く末、人類の行く末を考えると、過去はどうだったのか。ストレスのいっぱいな会社経営をしていますから、読書が趣味で、宇宙とか粒子物理学という本を非常に睡眠がとりやすいのでよく読むのですが、なかなか読み終わることは少ないです。宇宙の年齢が137億年、地球が45

億年、商売をしていますからこれを金額に直すと分かりやすいのですが、137億を年商として、人間が幾ら頑張っても100年前後ですから100円、このぐらいの差がある時の大きさが宇宙にある。

（スライド2）

次に、人類の祖先はアフリカで猿人から人類になったという説があります。諸説あるのでしょうが、昔は200～500万年前といわれていたのが、最新の説ですと600～700万年前に枝分かれしたのではないかと。今の現人類の直接の祖先のクロマニョン人は15～20万年前ぐらいにアフリカでスタートしたようです。20万年ですから、先ほどの売り上げ的にいうと137億円、45億円と比べて20万円、非常に短い歴史の中で人類が誕生し発展してきた。

（スライド3）

これをもっと近い歴史でみますと、もともとルーシーさんという１人の女性から発生したとよくいわれますけれども、そのアフリカから氷河期の中で食物を求めて出アフリカをしたのが、これも諸説あるのでしょうが、８万年ぐらい前に南アフリカの最南端に大きな集落があり、そこの集落が忽然と消えて、インド洋を北上して世界に伝播していった。人類の中継点がモンゴルぐらいにあり、そこにとどまった人が私どものモンゴリアン、そのまま南に行った人たちが氷河期に徒歩でオーストラリアに渡ってアボリジニ、アフリカに残った人は今の黒人、西に行ったのが白人になったと。こういうことを考えていきますと、悠久の歴史というけれども、人類の歴史というのはそんなに古くはないのかなと。

（スライド4）

もっと驚くことに、アフリカ大陸―その前にジャワ原人とか北京原人はいたのでしょうが全部死滅して、現人類がアメリカ大国に最初の１歩をしるしたのは、諸説あるのですが、１万2,000年前ぐらいだということです。ベーリング海峡を徒歩で渡ったと。これは実はテレビのディスカバリーチャンネルで見たのですが、最初の集団は11人だったのではないかと。男４人、女７人の集団だったらしいと。これは色々な考古学もあるのでしょうし、ＤＮＡの遺伝子工学の発展にもよるのでしょうが、ほぼ確定されたそうです。そこから北米のカナダ、アメリカインディアン、南米に渡ってインディオ、わずか１万2,000年ほど前から人類の文明がスタートしたのだと。この辺が僕としては非常にショックだったので、今日お話ししたいなと思いました。

（スライド5）

その中で、アメリカ大陸への第１歩がわずか１万2,000年前としますと、私たちの今の近代社会の科学の発展、環境破壊のスピードのけたたましさはすごいなと。僕らは分かっているけれども、人類の歴史からみて、これがどれだけけたたましい破壊を行っているのかが実感できるのではないかと思います。

そういう私も商売をしていますから、成長しているとすべてうまくいくわけです。成長していると全部楽しいのです。自分も楽しいし、一緒に仕事をしている社員の人たちも楽しいし、仕事の生きがいもあるし、収入も上がる。株も上がって収益が上がる。自分の頭の中は完全に裂かれている

わけです。寝る前に本を読んでいるときは、これじゃいかんなと思いながら眠りにつくのですが、朝起きると全く忘れて仕事に行って、「ほら、やれー」とやっているわけです。

（スライド６）

この中で現状の環境破壊度をみると、CO_2による温暖化、色々ありますが、僕は随分昔、若いころにスタンリー・キューブリックの「2001年宇宙の旅」を見たのです。ご覧になった方が多いと思うのですが、いらっしゃいますよね。見たのですがあまりよく分からなかった。たまたま僕は妹を亡くしまして非常に落ち込んでいるときだったのですが、自分自身、無宗教だったので非常につらい時、何かに頼りたいと思う時、ある意味ではこの映画が救いになった。映画がというか、映画では分からなかったので「朝日グラフ」の2001年宇宙の旅を買ったわけです。

見ていない人には絶対お薦めしたいと思うのですが、ハリウッドの映画人にいわせると、つくられた映画の中でベストピクチャーというと必ずこれがナンバー１になるそうです。いわゆる哲学的な映画だと。この中の１シーンで非常に印象的だったのは、類人猿の集団がいて、類人猿に学校の講義ではないですが大きな石のスレート板が教育をしているわけです。映画の中の話ですよ。その教育の結果、その後の集団同士の闘争の中で何かの大きな骨を武器として使った集団が勝利を収めるわけです。いわゆる道具を使うということの象徴として石であらわされたスーパーパワーが猿に教えている。その闘争の勝利に酔いしれたリーダーがその大きな骨を宙に投げるわけです。それはくるくるくるっと回って、20万年の時が過ぎて、その骨が地球から月に飛ぶスペースシップになるわけです。この映画の中でいっているのは、人類がスタートして道具を使い始めると、人類の発展、文化の発展、科学の発展は必然だったのだろうと。これを見たときに僕は20代後半だったと思うのですが、非常に印象に残っています。

（スライド７）

これは人口の推移です。ネットで探したのですが、このカーブというのはなかなか刺激的ではありませんか。皆さんよく数字で聞いてはいると思いますが、産業革命のころは10億人ですかね。僕は覚えているのですけれども、小学校高学年のころに世界の人口は45億人というように教えられました。随分昔の話ですから多分45年ぐらい前になると思うのですが、今は67億人です。人口爆発と昔からいわれたのですが、まさに爆発ですね。これが人口が爆発するだけではなくて、経済的にいいますと、今までエネルギーを消費できなかったようなＢＲＩＣｓといわれる地域の人たちが経済発展の恩恵に浴して、車を買う、いい家に住むという形が起きて、エネルギー、資材がどんどん高騰している今の現状です。

（スライド８）

この人口爆発と同時にCO_2増加のカーブも人口爆発以上に刺激的です。産業革命以前の280ppm弱ぐらいからずっと上がってきた大気中のCO_2濃度が、わずか 200年で380ppm弱になっている。温度の100年ごとの上昇率が過去100年間で0.6度上がったと。統計は色々あるのでしょうから正確とはいえませんが、0.6度ぐらい上がったと。これからの100年で４度上がるのではなかろうかとい

うような予測がある。

この現状を皆さん、僕が一番お話ししたかったのは、自分自身も含めてですが、時々は危機感を感じるけれども、普段は平気で生きている。この先どうなるのか考えたときに、125周年記念のお話としては非常に将来が暗いようなお話をしますが、現実としてはこのとおりです。解決策はあるのか。ただ、早稲田大学が代表するような最高学府のブレーンがこの問題をそれなりに解決していかないと、とんでもないことになるのだろう。

（スライド9）

人類はどのように生き残るのか。よくいわれることですが、エコロジー、エコロジーというが、環境を保全すると経済は崩壊するだろう。経済が崩壊すると恐慌とかで戦争に突っ走ったり、環境破壊ですと飢饉が起きたり、食料不足になって餓死者が出たり、いろいろなことが想定されます。そのような将来が待ち構えているのは間違いないのではなかろうか。これに異存のある人は多分いらっしゃらないと思うのです。人間ですから先のことはあまり深く考えずに忘れて、今日もうまい酒を飲んで、一生懸命仕事を頑張って、いい仲間と酒を飲んで楽しく過ごそうと、今日も楽しいし、明日も楽しいし、今年も楽しい、来年も楽しい、10年ぐらいはと思ってその先をあまりみないで済むのが人間ですから、深く考えてはいないけれども、考えざるを得なくなってきているのでなかろうかと思います。

（スライド10）

同じメッセージですね。さあどうしましょうと。

（スライド11）

実は古い話なのですが、僕はこんなところで皆さんにお話しするような立派な人間ではないと思うのですが、昔、個人的に辛いときに本を一生懸命読んだ時期がありました。スティーブン・ホーキング、有名ですよね。筋ジストロフィーに冒されている車いすの科学者の方です。『ブリーフ・ヒストリー・オブ・タイム』という本がベストセラーになりまして、僕も読んだのですけれども、彼が来日したときの記者会見で、なぜ他の知的生物と出会わないのかという質問を受けたときに、質問の根拠は、このギャラクシーでも数十億の星があり、その中には博士、地球と似たような惑星は幾らでもあるでしょうね。答え、いっぱいあるでしょうと。では、なぜ私たちは他の知的生物と遭遇しないのか。未知との遭遇のようなことがなぜ起きないのか。答えは、人間のような知的生物は多分寿命がとても短いのだろうと。ゴキブリと比べると、20万年前に発生したクロマニョン人、その末裔である我々があとどのくらいもつのか。過去の200年をみているとそんなに持ちそうもない感じはしませんか。ゴキブリと戦えるようなことはあり得ないのではないか。その寿命の短さによって、非常に長い宇宙規模での時間の中では出会う可能性があり得ない。線香花火以下の寿命しかもっていないのだろう。というのがスティーブン・ホーキング博士の答えだったそうです。

（スライド12）

では、どうやって生き残るか。最近はやったウィル・スミスの「アイ，ロボット」、ご覧になっ

た方も多いと思うのですが、その作者です。『ナイトフォール』とか色々なＳＦ作家であると同時に科学者であります。僕は彼のエッセーをほとんど全部読んだのですけれども、そのエッセーの中で、歴史から、科学から、物理から、ありとあらゆることのエッセーがありまして非常に楽しかったです。その中の１つで、もしも我々現代人が人口爆発、もしくは化石燃料を使い過ぎてエネルギー危機に陥ったりして滅亡するのであれば、これはまるでクロマニョン人と同時代に並行して生存していたネアンデルタール人が―欧州で氷河から凍った個体が見つかったりしていますが、氷河期に死滅してしまいました。多分、石炭の山の上で凍死したネアンデルタール人と同じであろうと。ネアンデルタール人は火を使えなかった。核分裂のプラントがありますが、もしも人類が核融合を使いこなせるようにならなければ、エネルギー補給ということに関しては非常に将来は短い。

僕は全く科学の知識がなくて聞きかじったことだけのお話を皆さんに伝聞しているだけなのですが、果たして核融合は実現できるのか。太陽が燃える仕組みを人間の手でコントロールできるのか。臨界点というのをよく新聞でも見ますけれども、臨界点というのは１億度だそうです。核分裂の炉心の温度は7,000度だそうです。面白いのは、絶対零度マイナス273度というこれ以上下がらない温度はあるけれども、温度というのは無限大だそうです。エネルギーを加えれば加えるほど温度は上がる。その中で１億度というのも大した温度ではないらしいのですが、１億度をどのようにコントロールするのか。ありとあらゆる物質は一瞬のうちに揮発してしまう。強力マグネットでコントロールするとか色々な話があるのですが、これが果たして実用化できるかどうかは専門家の間でも意見が分かれるところです。ただ、アメリカの投資とかをみているとあまり楽観的には思っていないのかもしれない。

ですから、アイザック・アシモフさんがおっしゃったように、もしも核融合が実現化できると―仮定の話ですよ―大気中の水素を全部使えたとすると、年代は覚えていませんが、1970年代前半のその当時の全世界のエネルギー消費を200万年供給できる。海中の四重水素を全部消費すると２兆年だそうです。海中に含まれる四重水素を全部取り切るということ自体不可能なのでしょうが、そのような宇宙よりも長い時間のエネルギー供給が可能だという話をしていました。ただ、これは実現可能だったときの話です。１つ明るい話もあると。

（スライド13）

ただ、現実的にみると進歩への果実、最終的には今まで20万年の新人類の歴史の中でシビライゼーションが得てきた果実をどのように振り分けると人類の将来が長くできるのかというところに行き着くのではないだろうかと思うのです。これは恐ろしい話だと思うのです。こういいながら僕は罪悪感でいっぱいなのですが、つい最近、新車を買っちゃったりしたのです。いかんなと思いながら排気量の大きい車を買っちゃったりして、だけど乗っている楽しさもある。こういう人間の煩悩を克服して、果たして捨てられるのか。

僕は、実は酒屋と米屋のせがれなのです。僕の祖父は丁稚奉公で実家に来て、一番働き者だったので番頭さんになって、一人娘と結婚して僕のじいさんになった。じいさんが丁稚のころの話をし

てくれたのですが、鶴見と横浜の真ん中ぐらいにある子安から東京の八重洲まで日帰りで米俵をリヤカーに積んで配達したそうです。多分25キロぐらいあるのではないですかね。多分、僕が生まれる前、戦前の話だと思います。それがまたやれるかな。車を全部あきらめて、せいぜい自転車で、飛行機はもう乗れない。そういう時代を考えても、多分不幸にはならないような気がするのですが、一番大きな問題は、経済は崩壊してしまうでしょうね。経済が崩壊してしまうとどうなるか。僕はこの辺の答えを今もっているわけではありませんが、そういうことが起きる可能性は多いのではないか。

今まで僕らが長い努力と知恵を蓄積してもってきたものをこれからも守れる部分は何かあるか。インターネットを維持するようなエネルギーはまだ使えるのではないだろうか。例えば、科学の発達によって、昔の帆船よりも何倍もスピードの速い帆船で旅行することも可能ではないか。もしくは自転車でもバッテリー的なものがあるような動力はできるのではないか。そういう色々な方向性をこれから僕らが考えていかなくてはいけないのではないかと思います。

本当に究極のような話を今しているわけですが、これを具体的にどのように考えて私たちが消化をしていくか。聞いていてもあまり明るくなる議題ではないとは思うのですが、避けては通れない話です。これこそが次世代が考えなくてはいけない、僕らが先見性をもつとするとこれが一番大事なイシューなのではないかと思います。

こうやってまとめて話してしまうと、ここで話は終わりなのですが、ちょうどいい機会ですし、皆さん早稲田の学生さんでしょうから、これに関して、逆にいいかえると、僕自身が行け行けどんどんで成長を目指している会社の経営者です。その経営者がこれを思いながら毎日経営をしているわけです。逆に不況とかと聞くと、これでエネルギー消費が減るしいいなと。僕が慰めで考えるのは、例えば自分が出店して成長したいと。成長しないとあんばいが悪いことがいっぱい起きると。外食はここ10年ぐらい全体のパイは増えていないのです。そのパイの中で陣取り合戦をしている限りは、エコロジー的には割と、褒められたことではないかもしれないけれども、まあまあむやみに暴走しているような感じではないのではないかとか、色々考えています。

皆さん、学生さんも含め社会人の方もいらっしゃるのでしょうが、できればこういうことをＱ＆Ａ的にお話しできたら僕自身もここで学ぶ機会になると思うのです。僕が答えをもっているわけではありませんが、ただ、こういう１つ大きなテーマを皆さんに投げるチャンスが今日あったなと思ったので、あえてこういう話をさせていただきました。いかがでしょうか。もしもよろしければ皆さんの方でご意見があれば、こういうアイデアとか、そんな暗い話をされても困るというようなことであれば意見交換していければ楽しいと思うのですが。楽しいというか刺激的だと思うのですが、いかがでしょうか。

○髙橋　　せっかくの機会ですので、遠慮なく、フロアからどうぞ。

○フロア１　　本日は貴重な講演をお聞かせいただきありがとうございます。

私は早稲田の大学院で学ばせていただいているのですが、率直に申し上げると、本日のお話はあ

る意味では非常に意外でした。このようなことを考えながら経営をなさっているというお話を含めてだったのですが。そこで、求められているようなディスカッションではないかもしれないのですが、こうした非常に大局的に物を考えるということが、普段の経営の中で実践としてどのようにあらわれているのか素朴な疑問としてあるのですが、そのあたりについてお聞かせいただけますでしょうか。

○長谷川　一般的な常識としては、効率のいい空調機とか調理器というレベルでしかないのです。ですから、自分自身考えていることと実際日々の業務の内容とがコンフリクトして、自分自身もすごく悩んで眠れないかというと、そうでもないわけです。そうすると、自分もそうなのだからほとんどの人もそうで、これはほとんどメタボリックのお父さんが、家族も楽しい、友達もいる、毎日お酒を飲んで楽しい思いをしていたのが、ある日突然、脳梗塞で倒れたとかがんになってしまったというのと同じような形になると思うのです。すごく心理的には、おれは大丈夫と思って毎日お酒を欠かさないようなお父さんと同じだと思うのです。ですから、お答えからすると、僕もサブスタンシャルなすごいことをやっているかというと全くやっていないのです。

ただ、アイデア的にいえることは、これは最後のページなのですが、この部分で何が大事かというと、多分こうなるのでしょうね。こうならないで、もしかしたら全世界が核戦争みたいになって人類滅亡ということも存在するかもしれない。逆に、中途半端に長引くことによって後戻りがきかないような環境破壊になって、滅亡ということもあるかもしれない。ただ、そのときに最も大事なのは政治なのではないかと思うのです。その政治も、歴史の中で人間の国家が発展してきて、国際連合ができてここまで来ているけれども、いまだに戦争をしている。イラクでも殺し合いをしていたり、地域戦が拡大している。

これもまたアイデアの話なのですが、政治の役割は何だろうと思うと、ちょっと唐突と思われるかもしれませんが、僕は戦後間もなく生まれたのですけれども、昔と比べて日本が大好きになってきたのです。それはなぜかというと、僕は随分世界を旅しましたし、色々な世界の人とも交わってきました。なぜ好きになってきたかというと、日本が世界の中でとても特殊性をもっていると思うからです。日本は圧倒的多数の国民が無宗教ではありませんか。これはいい悪いではありませんが、私は１つの宗教を本当に信じていますという方の方が圧倒的に少ないと僕は思うのです。お子さんが生まれるとお宮参り、七五三、これは神道です。結婚するときは多くの人が教会へ行ってクリスチャンの様式で結婚する。死ぬときはほとんど仏教徒です。僕は小学校のころ、戦争に負けた戦中派、戦前派の先生たちから、日本人は宗教というバックボーンがないからだらしないのだ、戦争に負けたのだとよく聞かされたのです。僕は今、逆だと思います。こういったら刺激的で反対される方がいっぱいいらっしゃるかもしれませんが、僕は日本という地域、国は、遺伝子ではないと思うのですが、多分、地理的な理由で１つの宗教に隷属せずに、一番優れたマニュアルとしての複数の宗教を違うオケージョンで使いこなしている唯一の地域だと思います。世界中にどこにもないです。

飛鳥時代、曽我兄弟の時代に尊仏拝仏論争というのがあって、日本はもとからある神道のほかに

仏教を国教にしてしまったわけです。子供のころは、おさい銭のある神社とお寺の区別などなしに遊んでいた。時々一緒にあったりするが、これは何なのだと。

ただ、僕は身内の死を経験したときに、仏教に関して本当に感銘したことがあります。皆さんここで、初七日はどういう存在意義があるか分かる方いらっしゃいますか。初七日、亡くなって7日目、これは悲劇的な死で残された人に義務を背負わせて最初の1週間を生き延びるための仕組みなのです。後を追って死にたいぐらい悲しんでいる人は、最初の1週間、愛する人間の初七日を務めるために死ぬわけにいかないわけです。その初七日の後にはすぐ四十九日が待っている。お礼状を出して一段落したら四十九日が待っている。百ヵ日が待っている。愛する者を失った人たちのためのこんなにすばらしい仕組みは多分世界中にないと思います。だから日本人はお葬式には仏教を圧倒的に支持しているのではないか。

これを深く考えますと、宗教というのは歴史的にみると戦争の原因をつくったり、経済戦争のときの殺し合いの道具に、靖国もそうだし、アラーもそうだし、人間の気持ちを一つにするための道具になっている場合が多いと思うのですが、なぜ日本だけが1つの宗教に縛られずこんなに自由に色々な宗教をところどころで使っていられるのか。これは答えは1つだけ、多分日本がとても平和な地域だったからだと思うのです。侍の殺し合いがあっても、昔から農耕民族で、富は石数ではかられていた。縄文時代から組織的な農作がされていたと最近読んだのですが、そうすると権力者が戦っても、大多数の人民に手をつけることは富の喪失になりますから、人民の生命の安全は非常に高かったのではないか。そういう環境の中で、例えば戦争で家族が皆殺し、娘やかみさんまで強姦されて殺されるような経験がとても少ない地域だったのではないだろうか。

第2次世界大戦の原爆投下とか沖縄戦までは殺りくということがなかったのではないだろうか。僕は勉強していませんよ。調べてもいません。僕の憶測です。そうだったのではないかと思うのです。そうすると理由がつきますね。犬だって、馬だって、年をとって死んでいくときにはそれなりに死を受け入れられるわけです。人間でも物すごい恨みがない限りは、そんなに1つの宗教に頼らなければ生きていけないものではないのではないか。

この国が原爆を落とされて―僕は今、政治で1つの仮説を言おうとしているのですけれども、これから人類が直面するであろう色々な困難を乗り越えるため、平和裏に期間をかけて乗り越えるための政治が大事だという話の1つの仮説です。僕はずっと思っていたのですが、原爆を経験したのは日本人だけなのです。欧州には永世中立を宣言したスイスがある。何で日本は永世中立を宣言しないのですか。それを宣言する権利とすると、日本以上にふさわしい国はないと思います。将来、永世中立連合をつくって、世界中が永世中立になれば戦争はなくなるはずです。そういう環境を世界中に構築しないで、これからの危機を迎えるととんでもないことになってしまうのではないか。エネルギーの話とか、核融合の話とか、色々しましたけれども、最終的に人間の英知というのはどこに来るかといえば、科学の進歩の道具をどのように使うか、使い方を決める政治が僕らの世界の将来を決するのではないかと思うのです。その中で日本の果たせる役割はかなり大きいのではない

かと思います。

大体、僕のお話はここで終わりなのですが、大きいテーマですので皆さんのご意見があったらお聞きしたいと思います。

○髙橋　　ほかにフロアからご意見等ございますか。

○フロア２　　本日は貴重なお話、ありがとうございました。商学部３年です。

先ほど、守る部分、捨てる部分という話だったのですけれども、まずそのためには種の保存ということが前提としてあると思うのですが、種の保存が地球全体の人に徹底されることがない限り、全員が捨てることを強要することはできないと思うので、一部の人が捨てることで進歩が阻まれて争いになるということは確かだと思います。

ただ、このまま発展させても争いは起こってきてしまうということだったと思うのですが、そのためにはまず温暖化という事象自体がまだ根拠に欠ける部分があるという話を聞いていて、それは二酸化炭素が増えていることと、たまたま温度が上がっていることが関連づけられているという説もあるとお聞きしたのですけれども、そういう人をも納得させるようなデータというか根拠をまず出して、それをやらないと絶対だめなのだということと、あとは種の保存が絶対的に必要なのだということが全世界の人に共有されない限りは、どちらにしても争いになってしまうのかなと思うので、まずはそういった価値観を徹底させることが大事なのかなとお話を聞いて思いました。

○長谷川　　温暖化を否定している科学者とか、アメリカのブッシュ政権ではよくありましたけれども、実は世界中でノーベル賞受賞者が一番多いのはアメリカです。その中の大多数のノーベル賞受賞科学者が連名でブッシュ政権に抗議しています。あからさまに科学的に先ほどいった温暖化、例えば大大陸自体が分裂して、大陸の移動があって今のような大陸の形、僕ら子供のころ図鑑で見たと思うのですが、世界中で火山の噴火があって大温暖化があったと。そのときの温暖化のスピードと比べると、過去 100年で 200倍ですって。地質学上、証明されているらしいです。ただ、僕は科学者ではないので、新聞で読んだり本で読んだりしたことの聞きかじりですけれども。ですから、最近、ブッシュ政権も温暖化を否定しなくなりなりました。

そういう中で、本当におっしゃるとおりだと思うのですが、最終的にはどちらの方向、いわゆる縮小均衡していくか現状維持を望むかどうかは別としても、今のような野放図な経済成長を続けながら人類が長く生存していくことは多分難しいだろうと思います。

ただ、種の保存という場合に、守る部分と捨てる部分というのは人の話ではありません。今までの科学の発展とかの仕組みの上で、便利だけれども使えなくなる部分が捨てる部分、便利でこれからも使い続けていけるような文明の利器もあるだろうという意味での話をしました。

○フロア３　　本日はどうもありがとうございます。商学部２年です。

これから人類が色々な困難を乗り越えて生きていくためには、温暖化などの問題を地球規模で協力して解決していくことが大事なのではないかというお話の趣旨だったと思うのですけれども、それで今ちょっと思ったのが、皆仲よく手を取りあって生きていくとかではなくて、憎しみ合いの中

に共生していく道がひょっとしてあるのではないのかと思ったのです。

例えば、僕はサッカーが好きなのですけれども、サッカーのダービーマッチとかで、日本だったらそうでもないのですが、外国のサッカーの試合とかを見ているとお互いのサポーターが憎しみ合っていたりしていて、今まで見た中で一番激しいなと思ったのがセビージャ対レアル・ベティスの試合です。本当にお互いのサポーターが殺し合いをしかねないような状態で、町中がお互いのサポーターは皆死ねばいいのにとか、そんなことを言い合っているのですけれども、それでもこの２つのチームの関係というのはお互いにどっちもつぶれることなく長年続いている。きれいに丸く治まればそれがベストなのだろうとは思うのですが、物すごくどす黒い言い方になっているのですけれども、ひょっとしたらそういう憎しみ合いの中に一緒に生きていく道があるのかもしれないなとちょっとだけ思いました。

○髙橋　　生物が人口過剰になって、自然の人口調節というか、数の淘汰をしようとするときにはそのようになるのではないでしょうか。それは工夫しなくてもそうなってしまう。例えば、過去でもそうですが、疫病か戦争でもって人口が減ると。これからもそれを繰り返して行くほうがいいのか、映画でいうと「ターミネーター」ではないけれども、世界核戦争があって、生き残った人間同士がいまだに殺し合っているような将来をプランするべきなのかというお話ですか。

○フロア３　　あるのかもしれないですけれども、僕も心の中では一番いいのは皆が平和で仲よく暮らすことなのではないのかなとは思うのですけれども……

○長谷川　　イメージからいうと、こういう感じですね。例えば、今、戦争で毒ガスを使ってはいけないことになっていますね、掟破りはいるのでしょうけれども。同じような形で、 CO_2排出量の規制というのではなくて、昔の軍縮のときの軍艦何台とか戦車何台以上はつくっていけないというようなイメージでもって、ガソリンはこれしか使ってはいけないとか、ニューキラープラントは何台までで、その中で何とかするようにしないと地球号という船は沈没してしまいます。そういう国際的な合意ができて、殺し合う代わりに憎しみでもって人口調節とか経済調節をするのではなくて、これだけの大脳をもった人類が英知を働かせないと、先ほどスタンリー・キューブリックの「2001年宇宙の旅」をいいましたが、ＳＦがすごいのは、類人猿から人類への進化の過程、昔はミッシングリンクといわれていて、どうやって起きたかを科学的に説明できないところに、神というのか、もしくは宇宙の真理というか、スーパーパワーというようなものを石という具象であらわしたものがあったと話しました。実は終わりは、今の人類が次の段階に進めるかどうかで、これが木星のところに浮いているのです。今のままの人類では人類の滅亡はそう遠くはないだろうと。ここでもう一度人類が進化できて、より長い繁栄を築けるかどうかのステージがもうそこまで来ている。この映画ができたのは1968年です。人類が月に最初に足をステップしたのは1969年です。本はその前に書かれているわけです。その方向性をリードしていくのは政治の力なのではないか。その政治を左右するのは僕ら一人一人の投票者、投票権をもった人間の考えで導いていくことができるのではないかということが先ほどのメッセージだったのです。

殺し合いがいいか、英知を使って自分たちの意志でより素晴しい将来を築いていくかの選択だと思うのです。締め方が難しいのですけれども、時間はちょうどぴったりでございます。よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

○髙橋　　長谷川先生、どうもありがとうございました。

地球環境の行く末
人類の行く末

株式会社グローバルダイニング
代表執行役社長 CEO
長谷川 耕造

1

GLOBAL-DINING

スライド1

地球・宇宙の年齢

- 137億年前・・・宇宙誕生
- 45億年前・・・地球誕生
- 40億年前・・・海の出現
- 39億年前・・・生命誕生

2

スライド2

人類の祖先

- ヒトの祖先「猿人」はアフリカで誕生（アフリカ起源説）
- 猿人の誕生は600万年前
- 現人類（新人）は約15万年前

3

スライド3

出アフリカ

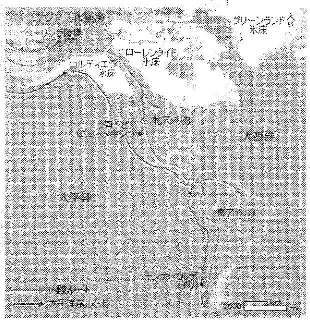
- 5～7万年前に西アジアへ進出
- 大中継点は現在のモンゴル付近

4

スライド4

アメリカ大陸への人類最初の一歩

- 1-2万年前にアジアから移住
- 11人が渡ったとも言われている？



(c) Microsoft Corporation. All Rights Reserved.

5

スライド5

人類発展の早さ

- エネルギー消費量の急増
- CO2の濃度上昇
- 温暖化

6

スライド6

2001年宇宙の旅

スタンリー キューブリック監督

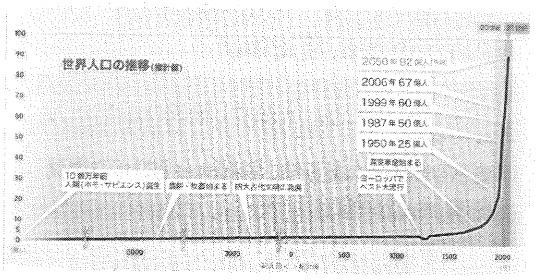
アーサー C. クラーク 原作

遠い昔、ヒトザルが他の獣と変わらない生活をおくっていた頃、謎の物体がヒトザル達の前に出現する。やがて1匹のヒトザルが物体の影響を受け、動物の骨を道具・武器として使う事を覚えた。獣を倒し多くの食物を手に入れられるようになったヒトザルは、反目する同じヒトザルに対しても武器を使用して殺害する。

7

スライド7

世界の人口推移

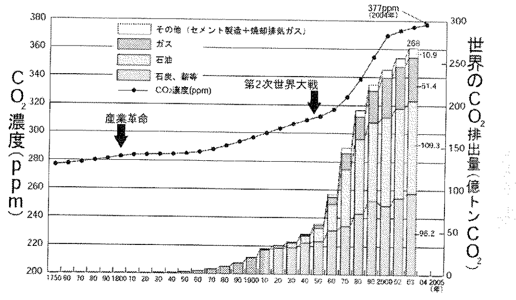


出典：国連人口部「World Population Prospects: The 2004 Revision

8

スライド8

温暖化＝CO2濃度上昇



出典：電気事業連合会「原子力図面集」

9

スライド9

どのように人類は生き残るのか

- 温暖化をストップするために、環境を保護したいが、注力しすぎると経済は破綻し、不況・恐慌により戦争に発展しかねない？

10

スライド10

さあ、どうする？

みなさん、目をつむってはいませんか？

11

スライド11

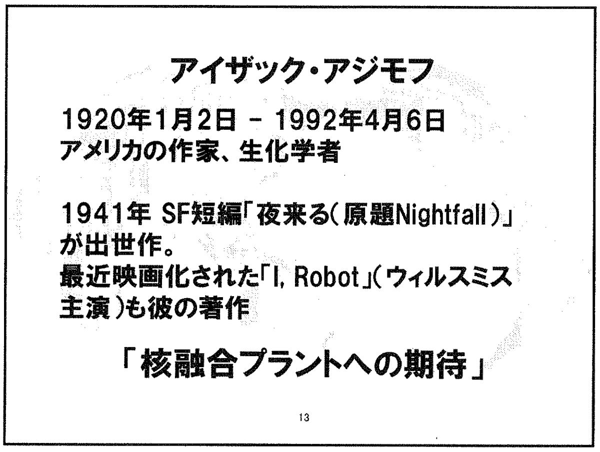
スティーヴン・ウィリアム・ホーキング
1942年1月8日 –
イギリスの理論物理学者

1988年『ホーキング、宇宙を語る』(原題 A Brief History Of Time)出版。発行部数が全世界1000万部、日本110万部を超えるベストセラーになる。

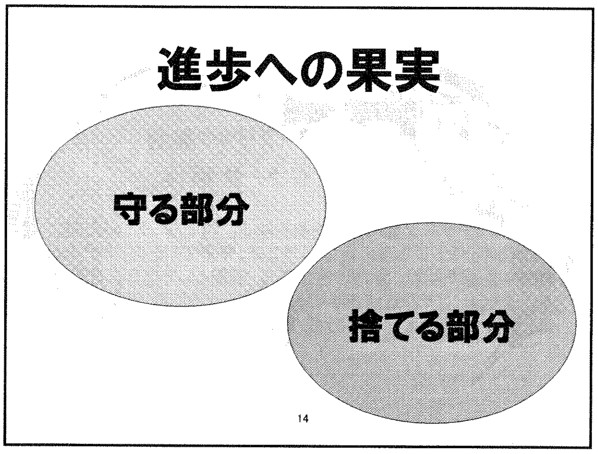
「なぜ他の知的生物と出会わないのか？」

12

スライド12



スライド13



スライド14